

安藤昌益

狩野亨吉

一 安藤昌益と其著書自然真営道

今から二百年前、安藤昌益なる人があつて、万物悉く相対的に成立する事実を根本の理由とし、苟くも絶対性を帯びたる独尊不易の教法及び政法は皆之を否定し、依て此等の法に由る現在の世の中即ち法世を、自然の道に由る世の中即ち自然世に向わしむるため、其中間道程として民族的農本組織を建設し、此組織を万国に普及せしむることに由つて、全人類社会の改造を達成せしめようとしたのである。当時の学者が三教以外に何事をも考え得なかつた間に在つて、かかる斬新なる思索を徹底せしめ、大胆なる抱負を実現しようとしたことは、啻に視聽を聳動する種類のことであるのみならず、實際重大なる問題を惹起する性質のものであるから、極めて謹慎なる態度を取り、軽率なる行動を避けたるがため、広く世人の耳目に触れることなく、其結果が遂にこの破格的人物の存在を忘るることに至らしめたのである。

1 安藤昌益の名が文献に見われたのは、宝暦四年刊行の新增書籍目録卷二に、其著書である孔子一世弁記二冊と自然真営道三冊とが掲載せられているのが最初であり、又最後であつたらうと思われる。此目録

には安藤良中としてあるが別人ではない。私は此二書を未だ見たことがないので、漠然とその内容を想像することは出来るが、はっきりしたことは知ることが出来ない。既に出版（出版。活字以前には木の板に刻）になったものとすれば誰か読んだ人もあつたらうに、其後徳川時代を過ぎ明治に入る迄も、安藤の名が人の口に上らない所を以て見ると、彼の著述は当時何等の反響を起さずして、いつしか忘れられてしまったものと思われる。もし其様な運命に陥つたものとすれば、あの時世大方読む人が文章の不味いのと分り難いと思われ、思想の卓越したる所を理解する迄に注意して見なかつた為と取らざるを得ない。

明治三十二年（一八三九）の頃であつた。私は自然真営道と題する原稿本を手に入れた。此本は元来百卷九十二冊あるべきところ、生死之巻という二冊が欠けて居た。九十二冊の内初めの二十三冊は破邪之巻、第二十四冊は法世之巻、第二十五冊は真道哲論、第二十七冊以下は皆顕正之巻となつていた。生死之巻もこの顕正之巻の内である。毎巻に確庵堂良中著と記し、宝暦五年（二七五五）に書いた自序の末に鶴間良童と推読される書印があつた。其頃は宝暦書目を参考することに気付かなかつたので、多分鶴間が本名であると思ひ心当りを尋ねて見たが分るう筈がなく、其間に左傾派の人にも洩伝わり、幾分宣伝用に使われたかとも思われる。是程の見識を持つていた人の本名が知れないのは残念と思つて、最後の手段として原稿本の渋紙表紙に使用された反故紙を一々剥がしながら調べて見ると、幸いにも其中から手紙の残闕が二三発見せられ、其内容から本名が安藤昌益であると推定されたのである。

自然真営道の原稿本は大正十二年（一九二三）の春東京帝国大学（現・東京大学）に買上げられ、其年の大震災に焼けてしまった。こういう事にならうとは夢思わなかつたので、私も又私から借りて見た二三の友

人も、誰あつて抄写して置かなかつた。弥々なくなつて見ると、複本を拵えて置けば善かつたと悔んだが始まらない。然るに翌年幸いにも又安藤昌益の著した統道真伝と云う書物を得ることが出来た。其本は原稿ではなく門人が写したと思わるるもので、五冊あるが完本ではない。此本を獲て幾分損失を恢復した様な気がしたもの、此書は門人に示す為めの抄録のごとく思われ、概要を覗うことは出来るが、内容の上にも修辞の上にも著しい差異があつて、同一人の著述としては甚だ見劣りがあるのである。自然真宮道に在つては安藤は畢生の精力を傾注した思索の結果を、百年の後を期して書残すのであるとの用意のもとに筆を採つたものであるから、何等憚る所なく、最も大胆なる敘述をなし得たため、一体に不文なる安藤も或は同情に驅られ、或は義憤に激せられて忽ち雄弁となり、古来聖人と尊ばれ英雄と崇められたる人物を拉し来つて叱責罵倒の標的となし、氣焰万丈、全く当るべからざる勢を示し、極端なる場合には敢然決死の態度を以て痛烈肺肝を貫くの言を為すのであつた。

止むことを得ずして何時でも決死の態度をとつたろうと思わるる彼れ安藤は実は純粹なる平和主義の人であつた。平和を唱えながら直ぐと腕力に訴える様な族とは全然其選を異にしていたのである。彼の常に云う語に、我道には争いなし、吾は兵を語らず、吾は戦わず、と云うのがある。後に説明するが此語此考は実に彼の思索の中樞を成している所から派生し来るので、決して卑怯な心から出たのではない。又此考が形を変じて前陳べた所の百年の後を期して書残すのであると云う語に成つたことは尤も味うべき所である。私は自然真宮道の中に数ヶ所で此語に出遇つた。一面には略本三冊を公刊しながら、他方には全本百巻は容易に公にしないと云つたことで、安藤がこうした考になつた理由は推測するに難からずである。先以て彼は公にすべきものと公にすべからざるものとの區別を知つて居た

と云うが一つの理由である。是が又平和主義と関連しているのは明白である。もしかの猛烈なる完本をそのまま出版したとすれば、而して世人に読まれ、多少とも影響するところがあつたとすれば、其結果は知るべきで、直に彼と当時の為政者との争いとなることは、何も之を実行に訴えなくとも、考えて見ただけでも明白な事柄である。然るに安藤は徹頭徹尾争いを嫌っている。争いを止めようと云うのが彼の主張であるのである。それ故に彼は先ず遠廻的なる略本を公刊して世人を啓発することに勉め、機熟するを見て全本を示そうとしたに違いがない。彼は人騒がせをして迄も功名を急ぎ、結局主義主張を棒に振ると云う如き愚策に出でなかつたのだと考えるのが當っていると思う。

私が今遠廻的と云つたのは未だ見ぬ本の内容を評したもので推測から出ている、當っているか居ないかは後に再び論ずることにして、今は全本自然真宮道に就き安藤の主義主張が那邊に在るかを検覈して見よう。

二 安藤昌益の思索の径路

安藤昌益が社会の改造を思立つに至つた訳は、世間に不合理なる事が広く行わるるを見て、如何なる原因があつてかかる訳の分らぬ社会が成立しているのかと深く尋ねて見たことが始めである。彼が世間の不合理に憤慨したただけで起つたら、彼は単に涙の人であつたので、普通一般の革命家とか又は其雷同者とかの列に墮したに相違ない。しかし彼は情の人であつたと同時に又智の人であつた。それ故熟慮熟考を重ね弥々十二分に理由を突き止めたと思う迄は軽率に蹶起しようとはしなかつたのである。ここに彼の思索の径路を辿つて少し精しく述べて見よう。

冷静に世間を観察すれば、偽善にして虫の良い輩ら、不公平にして横暴を振舞う族ら等、もし神仏が在ましたら早くどうかして貰い度いものが頗る多いことが明白になって来る。万一其の連中が上に立って其模範を示される様なことがあつては全く恐入るべきことであると云わざるを得ない。ところがそうした場合が昔から繰返されがちであるのが世相だと云うことに気付いて見たら、正義の士は黙しては居られない筈である。安藤は此見地からして、歴史上に現れたる英雄豪傑を引摺出し、秀吉家康を其殿りとして筆誅することに勉めた。丁度誂草と云う書物の著者が企てたと同じ様に広い範圍に亘っているが、些の戲誑を交えず真摯一点張で通している。彼がこの種類の問題を主にして起つに至つたとすれば、彼は山県大弐(江戸中期の兵学者。尊王論者)とか維新の志士とか、或は少し變つて宗教の祖師とかいった風の人になつたであらう。ところが彼にはそんな問題より尚大事であると考えた事があつた。其事は昔から当然の事と思つて、誰も疑いを挟まないで過來つたものであるのに、彼は又其事を怪しからぬ事と解し、しかも亦天下此以上重大なる問題なしと考へたところに彼の獨創的の閃きを發揮するのである。

正保(一六四五)の昔し佐倉の義民木内宗吾が刑死した事や、宝曆(一七五一)の当時八幡の暴主金森頼錦が封(領土)を失つた事や、又夫等の事件ほど人口に膾炙するに至らないとは云い、所在聞くところのかの百姓一揆と称するものは、皆治者と被治者の争いで実に苦々しい話である。しかし其原因を探つて見れば孰れも苛斂誅求に堪えなかつた農民の不平から起つた事で、根本の理由は生活を劫かされたと云う所に歸するから、実に強いので、其ため往々治者が被治者に負ける様な珍妙な事になるのである。しかしこう云う事件を個々の事件として眺めただけでは何時迄も苦々しい事件という以外に何等

の意味を発見することが出来ないのである。ところが安藤は此種類の事件を日本に起った個々の事件として見ることの外に、之を一括して人類生存の意義に関する極めて重大なる問題に変形せしめたのである。

諺は中心からの喚びで、何等囚われざる宣言である。其一つに米は命の親と云うのがある。人はパンのみで生きるのではないと横鎗を入れることも出来る。しかしそう云う人も論より証拠、矢張り必要とするであっては、生命を支うる一番大切なものは食物であることは異論のあるべき筈がないので、其他のものは二次的三次的に考えらるべきものであると云わなければならない。此事實は三歳の童子も知っている。いや生れたばかりの赤坊も自然に知っているほど、それほど人間にとっては大切な事である。もしこの大切な事実を忘れる様な不埒ものがあつたら、命を失うたからとて不平も云えない筈である。此大切な事実^はに直面して安藤は同胞の反省を促し覚醒を求むること痛切なるものがある。

安藤曰く、かの農民を見よ。農民は自ら直に耕して食い、以って独立の生活を営むもので、端的に此大切な事実を実現しつつあるのではないか。そうした生活の模範を示すところの直耕の農民は、道理の上から須く一番貴まれなければならない筈であるのに、常に下にしかれて貧乏に苦しんでいる。之に反し自ら耕さずして他人の耕したものを贅沢にも貪る如くに食つて生活する徒食者は、独立しては立行けぬもので、実に憐むべきものである。しかるにも係らずそうした不耕貪食の徒は常に農民の上に位し、安逸な楽みをなしている。実に不公平な都合なことで、全く面白くない世相である。こう安藤は觀察したものである。ところが世界孰れの国に在ってもこの面白くないことが行われているという

ことに気付いて見ると所謂教だの政だのいうものは一体何所を目標として見ているのかと憤慨して見たくなるのである。此見地に立つて安藤は治国平天下の代表者聖人孔子を罵り、救世の代表者世尊釈迦をも呵り付けるのである。もし彼が此特色ある問題を提げて起つたとすれば彼は欧米の主義者（社会主義者）（共産主義者）の先駆者となつたであらう。

然るに彼の透徹性は茲に止ることを許さず、彼をして百尺竿頭一步を進（工夫の上に工夫）（夫を加える）ましめ、何故に治国救世を標榜する政や教が揃いも揃つて、しかく無能であつて、世間の悪党をも退治することも出来ず、又古今東西に亘つて行わるる不公平をも匡正することが出来ないものであるかと問わしめたのである。彼は自ら此窮極的な問題を提出し、其解決を求めんがため博く深く考察を運らし、是を法世に囚れたる人に聞くを欲せず、人皇時代を突破し、神代を突破し、遂に原始時代に突貫したものである。其間彼が歴史に対する面白い観察もあるが略することとする。偕て原始時代に遡つて見れば其所にはあらゆる事物の搖籃（ゆりかご）が見出され、而して其搖籃の中に育ちつつある事物の起原が夫れ自身の詐らざる告白を為すことに由つて、彼はやつと彼の提出した大問題の解決方法を考付いたのであつた。夫れから後は一瀉千里、完全に此大問題を解決することが出来たと思つた。彼が搖籃の中に見出したと云うものは腕力であつた。同時に智力もあつた。其腕力それから智力、それから金力、それから夫等の力によつて組立てられた階級、分業、政治、法律、宗教、学問、あるとあらゆる制度文物が悉く間違つていふと思つた事柄の原因をなしてと云うことが、彼にとつては疑うことの出来ない事実となつた。彼が茲に気付いた時に靜に法世を棄てようとの決心を定めた。最早彼は法世に生息し法世を有難く思つていゝる人達を罵倒したり相手にしたりする違がない。寧ろ法世其物を棄てなければな

らないのである。然らば先其教を棄てよう、其政を棄てよう、其文字言語をも棄てよう、よろしい思想其物迄も棄ててしまえ。是が彼の喚びである。かくして彼は遂に思想の虚無主義に立つことを餘儀なくせられたのである。

破邪之卷二十餘卷は如上の意氣考察を以て書綴られたもので、実に極端なる懷疑の眼を以て思想、言語、文学、政治、宗教其他一切の人為的施設と及び此等の事に携わった偉人物を批評したものである。批評し去り批評し盡し何等採るべきところなしと見て、安藤は遂に法世其者を棄てようと決心し、棄て得る限りの總ての物を棄て去った所で、尚且つ棄てようとしてもどうしても棄てられない物が残った。そは何ものである。曰く自然。

自然は最後の事実である。所謂論より証拠の最も優れたる標本で、思慮分別を離れてその儘に存在する。その一切を許容し包容し成立せしめて、更に是非曲直美醜善悪を問わない所に実に測るべからざる偉大さがしのばれる。此自然を人々の思慮分別に由て如何に観るかと云う事が、聽て科学者を生じ哲学者を生じ宗教家を生ずる。安藤は既に法世の思想を棄てると力み、虚無主義に立ったこと故、彼は自然其儘を直観しようとして勉めた。其主観的思索を藉らず、虚心坦懷に自然に聞こうとした所は実によく科学者の態度に近かった。然らば彼は科学者であったかと言え、勿論その傾向はあったが、今日の科学者と比べられる様な精確なる知識を持っていた訳ではない。是を当時の彼に望むのは無理な注文と云わなければなるまい。しかし彼は幸いにも自然を根本的に理解するに当って必要欠くべからざる見方に打当てた。即ち彼は自然を処理する骨を悟ったのである。其骨は主観的とはいえ全く根本的の原則であったがため、直にそれを自然の癖ととった、即ち自然の作用であり性質であると思つた

のである。此見方を會得すると同時に、今まで彼を惱ましつた思想の盤根錯節（込み入った解決）は直に消滅してしまつたのであるから、彼は確に自然の妙用を知つたと思つたのである。然らばそれは何ものである。曰く互性活真。

互性活真を平易に云えば一切の事物は相對して成立すると云う事である。此四字に由て現わさるる宇宙の真理は、今迄誰も氣付かなかつたと安藤は主張する。彼は更に其真理を生れながらにして知つて居たとも主張する。これは大きにそうでないと思ふ。先ず第一に生れながらに知つていたと云うのは、人から聞いたたり、本で見たりしたのではないと云う意味で、赤坊の時から分つていたと云う意味ではなからう。大方苦心慘憺の結果で相当永くかかつて其所に辿付いたものであるであらう。尤も最後の瞬間は頓悟（悟りを開く）でも感悟（感ずる）でもよろしい。次に又誰も知つて居なかつたと云う事も、安藤がしかく思つただけで、彼が寡聞のためそう思つたのであらうとして置く。彼は常に吾は無学である。吾に師なし、吾生れながらにして知る、と云つてゐるが、蓋し正直な告白であらうと思ふからである。しかし真理とか原則とか云うものは安藤の食物と同じことで一人の私有すべきものではない。凡そ事相を直観することにより、或は論理を徹底せしむることにより、誰でも到達することの出来る筈のものである。唯其物を知識の形に代え、言葉の着物を着せることに巧拙があるために、種々の姿となり或は別物の如く思われることもあるのである。既に仏教に在ては種々な形で相對性の原理を活用し、時には之を乱用して思想の迷宮を作り、人を煙に捲いてゐるのみか、自らも其迷宮に拘束せられて脱出し兼ねてゐる。哲学では知識の相對性として認められは又種々な哲學者の基礎觀念に取入れられてゐる。又近頃物理學者は總ゆる現象の根本形式なる運動の相對性を的確に把え得て、其論

法を透徹し、哲学者や宗教家などの夢にも思わない処に向つて飛躍を試みつつあるのである。

今物理学のことを一寸例にした序でに、直接互性活真には関係は無いとは云うものの、ずっと後に引合にすることがあり、又先以て思想を徹底させ其実現を為さしむることに由て危険が伴つて来る場合があるのを説明するに都合がよいのであるから、餘談ではあるが横道に這入る。物理学と云えばこれ以上正確な知識は望まれないもので、精神科学も将来その前に屈服する時期が来るであろうし、救世の実も始めて此学問に因て挙げらるる事と思わせらるのであるが、普通の頭には這入り難いので左程には採られていない様だ。しかし其知識を正確ならしむるために幾多の学者を犠牲にした事などは、軍事界や宗教界などに比べて数が少ない様であるから云わずもがな、之を實際に応用するに及んでは驚くべき効果を奏して、汽船、汽車、電車、自働車を走らせ飛行機をも飛ばせて、実に人世の便利此上もない。同時に又人には怪我をさせるし轢殺しもあるし墜落もさせる、物騒な次第である。是は是れ文明の利器ではあるが、甚だ危険極まるものと云わざるを得ない。その上こういう世の中になつて来ると、かの精神界の仕事が聊か見劣りがする。依て倫理道德は日に衰頽に赴くかのごとくに見えて来る。茲に於て物質的文明は駄目と来る。こうなると一方から精神的文化靈的文明の喚びが挙がるのも不思議はない。事実こう云うことがあるから不思議はないといふのである。而して物理学即ち物質的思想を徹底せしむることに因て危険を伴う事実が明白であるから、其所が悪いのであると云うなら、それをも認めることとする。偕て問題を茲まで運んで来ると私は義務として其解決を試みなければならぬ。そこで仮りに百歩を精神論者に譲り、彼等の危険視する汽船、汽車、電車、自働車、飛行機を操縦することは一切止めることにする。而して物理学の理論だけを講釈することを聴して貰うのを妥

協の條件として提出する。而して其理由はこうである。物理学は正確なる知識である。自然の道理を如実に言語に移したばかりの純潔正真の知識である。それでなかったら、何であれだけ便利な機械を作つて人間の幸福を増進することが出来たであろう。幸福を願わない人ならいざしらず、苟も共存共栄人類の発展を望むことであるなら、どうか物理学に信頼して貰いたい。夫を危険が伴うと見て棄てることになる、取りも直さず正確なる知識を失うことになる。正確なる知識を持つことを許されずして、何時実現出来るか分らない理想のみを説く所の精神科学にばかり頼ることになると、頭がどうかなつて、其所に迷いが出で来り、思想の漢土化天然化を見る如きことがないとも限らない。夫は甚だ迷惑なことだ。とつくりとこうした所を考えて見て、寧ろ各自此物理学を研究して見たらば如何であろう。どうしても危険でならないと思つたら致方がないことで、其時精神的科学に鞍替しても何等差支のないことと思われる。しかし人まで勧める態度が悪いとあれば、それは止めることにして、唯自分等同志にのみ物理学を研究することを聴いて貰いたい。とこういふのである。

右の様な具合にして折衝を試みたら、大抵妥協が成立するでなからうかと思われる。いやそれよりか唯物理学の理論のみを発表し、仮令如何なる便利の機械の考案が出来ていても、その実現を見合はすことにしたら始めから問題を起す様な氣遣がないことは明白である。此処である。思想の衝突でも起つた場合、又衝突を避けようとした場合、お互どうした態度をとつたら、人に迷惑をかけないで済むかと云うことが思付くであろう。ところが安藤昌益はチャンと衝突を避けようとする考えで、始から問題の起る様な氣遣のない態度を取つたと思われる。それは次節に入つて説明する。

安藤が事物の相対性を互性活真と看破する事により、前人未知の秘を発き無上の道理を獲得したる

ものと思つたのである。孔子も釈迦も此道理を弁えずして政教を布いたと取り、聴すべからざる暴挙にして直に其無効を主張する。之に反し自分の説くところは自然の妙道より発するもので此の迷妄を交えず、純潔正真にして全く信頼するに足るものであるが故に、必ず将来世間に行わるること疑いなしと宣言する。彼はこの主張宣言を自然真當道の序跋に簡單明瞭に摘載し了つて、遂に自ら真人であり救世主であると喚んでゐる。

三 安藤昌益の人物

安藤昌益は狂人でなかつたか。彼は世人の貴しとする所を貴むことを知らず、増長して自ら真人救世主と称するに至つては真に正氣の沙汰とは取れない。就中尤も人を驚すに足るものは、彼が家康当時神君と崇められた家康に向つた時である。其心術の陋を見るや彼は忽ち悪罵の権化に變じ、峻嚴酷烈其度を超え、叱責罵辱其頂に達し、読む者をして足顫い手汗するを禁ぜざらしむるものがあつた。而して其事を記したる所に誰人の優しき心で爲したことであろう、四重五重の張紙があつて、丁寧到家康の名前を覆い隠していた程である。かかる場面を見せられては彼は所謂曉に吠ゆる犬で、慢心の結果真に狂するに至つたのではなからうかとの疑がが出て来たこともあつた。しかし此の如きは全く彼が義憤に焰えた時の有様で、一面温和な柔順な、そして常識に富み諧謔の餘裕さえも持っていたことを確かめたので私は初めて安藤の狂者ならざるを信ずるに至つたのである。今其証拠を挙げて見ようと思ふ。

まず第一に彼が常識を備えているという証拠はかの猛烈なる自然真當道を公表するのを控えたと言

うことが何より雄弁に物語るのである。このことは隨處に話して来たので再説の必要がないと思うが、之に關連している問題で取残されたものがある。それは宝曆書目に載っている自然真宮道の内容は遠廻的であつたらうと云うことである。遠廻的とは内容の性質を指すのではなく効果の上に就て云つたので、例えば少し前に述べて見たところの物理学の理論ばかりを説いたと云つた様な訳で、主として互性活真の道理を説明し、人心を刺激する如き具體的の議論を試みなかったのではないかと云うのである。即ち始から問題の起る氣遣いがない様な態度を取つたらうと云うことである。もし此推測にして當っているなら、彼が常識を備えていたという証拠は更に裏書された訳であることは言う迄もない。

彼の常識に附帶して彼の愛国心を思い出さざるを得ない。是も亦常識を助けて全本の公表を見合せさする一因となつたのではなからうかとの想像は当らずと雖も遠からずであらうと思つている。私は劈頭第一に民族的農本組織と云う言葉を使つて置いたが、この民族である。彼が我民族を建てようとの意志熱情は到る處に表われて實にいたましい程である。彼は神を信ぜず仏を信ぜず又聖人を信ぜず、全く傍若無人の言を弄して憚らざるにも係らず、事苟も我国の利害に關すと見れば、蹶然起つて神国を喚び、此神国をどうする積りであるかと詰責するのである。かくして聖徳太子は異国の仏を信じ、儒を尚ぶと云う訳で甚だ香ばしからぬ名称を奉られ、最澄空海の如きは態々渡唐したあげく、仏教の糟粕(残り)を嘗むるだけの事以外に何んにもないとあつて、鸚鵡扱いにされている。是皆我神国の貴きを知らずして、妄りに外国の思想文物にかぶれた罪に問われたのである。何事によらず我を忘れ彼れに従う浮薄ものの反省を促すこと痛切なるものがある。かかる極端なる愛国的態度は彼が思想の根元より発露し来る精華であつて、決して単純なる感情に基いてのではない。猶更阿諛苟同の念など

微塵も雜っている訳のものではない。是は彼の如く徹底的に自覚することに由つて初めて到達し得る境遇であることは、彼と共に互性活真の悟りを開く者にあつて首肯（うな）せらるるのである。

第二に諧謔の餘裕を持つていた証拠として、法世之卷全体を提挙する。安藤は破邪之卷最初の数冊に於て、専ら文字、言語、思想等の取るに足らざるを述べ、夫より具体的施設に入り宗教、学問、政治等を調べ、第二十三卷家康の批評を終るまでは正に真摯其物の如く、時には熱狂して横溢暴戾を極むるも、終に真摯の延長としか取れないのである。ところが第二十三卷を終り第二十四卷法世之卷に入るに及んで、急に恰好をくずし忽ちどつと吹出したものである。彼は法世の不合理、矛盾、滑稽なるに呆れはて、自ら其批判の任に当るを潔しとせずと云つた格で、今後は鳥獸虫魚介、あるとあらゆる生物を呼出し、彼に代り法世の批評を試みしめたものである。革命の暁を告ぐる鷄を先鋒として、入り立交り、説来り説去るところ、悉く其動物の形態を盡し、其性情を穿ち、直に之を世上の人に移して、愚弄嘲笑の具に供し、一上一下応接に違なく、其着想の奇と其用語の妙と相俟つて、読む者をして抱腹絶倒、快哉を叫ばしむるに足るもの再三ならずあつた。此餘裕此諧謔はどうしても狂人の技量とは取れない。のみならず此卷に現れた動物に関する知識の豊富正確なるを以て安藤は本草に通じた医者であつたのではなからうかと推定したのである。

最後に、温和柔順なる人であつたろうとの証拠を挙げる。彼は争を好まなかつたというのは彼の知的思索の結果と見らるる恐れがあるから、ここには彼の愛好した人物は孰れも温順な人であつたと云うことを示して、情的にもそうした傾向のあつたのであろうとのことを立証する。何れの巻であつたか記憶はないが、救世主自ら尤も完全と思つてゐる歴史的人物を拔擢して見せると云うのであるか

ら、正襟せいきん（えりを）して見ていると、理想的完全人一名と、半人前の人一名と、都合二名を指名することであつた。偕さて指名された完全人は誰であつたか。曰いわく曾參そうしん（孔子の弟子）字は子輿。半人前はんじんぜんの人は。曰いわく陶淵明。

此人選の仕方を見れば安藤の衷心ちゆうしん（こころ）がよく分る。最早彼を疑う必要はあるまい。假令尚狂人であつたとしても、此程度の狂人なら全く安心して交際の出来るものと云わなければならぬ。されば寧ろ彼を狂人と見ることを止め、變つてはいるが親しむべき人間であると取るのが至当であらう。

以上は私が自然真當道を読んだ時の記憶を辿り、主として安藤の確信と決意の生じ來つた徑路を示し、兼ねて又彼が危険視すべき人物でなかつた証拠を述べたのである。これだけのことを以て見ても彼は容易ならぬ人であつたと云えよう。もしその性行事蹟の詳かなるを知ることが出来たら、一層の興味を呼び起すに足ることがあるかも知れない。しかし私はそれ等のことを調べる暇がなかつたので、従つて語るべき多くのものを持たないのを遺憾とする。唯ここに私の知り得た雑多のことを一つ書がきの如く列記して、読者諸君の参考に供することとする。興味を覚え餘暇を持ち自ら穿鑿せんさくして見ようと欲する諸君の手懸てがかりに利用せらるることあらば幸福の次第である。

安藤昌益は確童堂良中と号し、出羽国久保田即ち今の秋田市の人である。

彼の高弟に南部八戸侯ちゆうの医者神山仙庵という人がある。子孫なご今尚お八戸町に現存してはいるが、火災のため記録類を焼盡やまつくして何等なんら伝つたうるものがない。

此外の門人では島盛伊兵衛、北田忠之丞、中村右助皆八戸住である。高橋大和守は南部の人、関立竹、上田祐專、福田六郎、中居伊勢守、沢本徳兵衛、中邑忠平、村井彦兵衛等も亦南部の人であらう

と思われる。

京都三條柳馬場上に住せる明石龍映、富小路に住せる有来静香、大阪西横堀の志津貞中、道修町の森映確、江戸本町二丁目の村井中香、奥州須賀川の渡辺湛香、蝦夷松前の葛原堅衛等も亦門人である。香子、定幸、道右衛門等の門人は姓氏が判明しない。

照井竹泉なる人より安藤に寄せた手紙の文面より推察すれば、此人は先輩であつたらしい。

自然真営道の原稿を持伝えた人は北千住町の橋本律蔵である。

以下私は安藤の説の重要な部分を少しく精細に吟味して見よう。

四 自然の正しき見方

自然真営道なり統道真伝なりを読んで見て最初に気付くことは、自然と云う文字の連発である。行列をしていると云うべきか、経緯をなしていると云うべきか、到るところに出て来る。凡そ古今東西の書物で自然と云う語をかくも多く用いているのは断じて無いと思われる。此事だけを以て見ても、自然と云う事が安藤にとつては如何に大事のものであつたかと云うことは認めざるを得ない。申す迄もないことだが、自然は安藤ばかりにではなく誰人にも大事なのである。真に大事ではあるが其あまりに大事であることが崇つて、常人にはその大事である事が往々忘れられる傾きがある。例えば親兄弟や、水や、空気や、大地や、太陽や、それ其自然其物の有難いことを忘れる様なことはないとは限らぬであろう。其位のことには能く知っていると言う人もあろう。如何にも事実としては野蠻人も知っている。しかし文化が開けて来ると忘れる人が出来るようになり、さては着物とか金とかばかりを有難

がり、進んでは思想を有難がり、そうしたものを多く所有する族を尊んだり羨しがったりして、其結果が親に孝行を盡くすことを旧弊と取ったり、米を供給してくれる農民を賤しいものと取ったりする様なこととなる。是はどうした事じゃ。自然を忘れたからである。有難い自然を忘れ勝になる人自然の正体を見届けようなどと努力することは、直接パンなり地位なりを得る助けにもならないことであるから、出来ないことであつて、是はどうしても眞の学者とか聖人とか救世主とでも云う人に求むることにならなければならないのであろう。

然らば聖人格の人は自然の正体を何と見たか。曰く天、大極、無極。曰く真如生滅。曰く実体。曰く神。まだいくらかもある。孰れも考えるには考えたものであろうが、どうも考過ぎて廻りくどい様に思われるものが多い。殊に神と云う觀念は内存の場合はまだしもの事、外存的になつて自然を創造したものとすると、貴族的であつたり、不合理、不人情であつたり、甚しきに至つては欺瞞的であるのであるから驚かざるを得ない。是はキリスト教の神或は又其以上の手腕を有する阿弥陀如来を見ればよく分ることである。勿論説くものよりすれば方便とも取られ、聴くものよりすれば鱗の頭も信心柄と取られ、相對づくで信仰する分には何等差支のないことではあるが、もし實際に當つて其信仰で裏書した神の国の、仏の国のと云う不渡手形を振廻すことになると、馬鹿げた大事件を生ずる恐れもあることは歴史を見れば直ぐ分ることであり、小さな事件は近年我国でもいくらかも起つたことであるから顔かれるであらう。偕て宗教家なり哲学者なりが自然の正体を捉えようとして旨く往かなかつたすれば、一つ安藤の考を聞いて見よう。安藤は思想の虚無主義に立脚しているのであるから、何等思想の遊戯に耽るのではなし、直に自然は自然なりと取る。甚だ手取り早いようではあるが、其所まで

達するには度胸も要るし、思想を以て思想を遣る手数も並大抵でないと思わなければならぬ。

統道真伝巻首に聖人自然の真道を失る論と題し、劈頭先ず彼の自然觀を述べた句がある。——夫れ自然は始も無く終りも無し。自り感き他を俟つに非ず、自ら推して至るに非ず。常に自り感くに小進して温暖發生の氣行あり。大進して熱烈盛育の氣行あり。小退して涼燥実收の氣行あり。大退して冷寒枯蔵の氣行あり。小大の進退して休する則は進まず退かず。小大の進退に就て妄りに離別せず。小大の進退を革め妄りに雑えず。是れ五行自り然る常の氣行あり。——此語で分る如く安藤は自然は自然なりで、日月位し、四時行われ、万物生育する自然の現象其儘を自然と見ているので、其現象は皆自然が独りで働いて起すのであって、決して他に神仏のごとき者を俟って起るのでないと主張するのである。そこで彼は又歩を進めて自然を曲解する聖人の論を打破するに着手する。

然るに伏羲○を大極の図と為し、中に何も無き所に於て衆理を具うと為し、空理を以て極意と為すこと甚だ失れり。円相は氣満の象積氣の貌なり。之を以て転定の異前と為し、是が動陽儀を天体と為し、静陰儀を地体と為し、天地を二と為し、上尊下卑の位を附す。是れ己れ衆の上に立たんが為め、私法を以て転下に道を失る根源なり矣。是より上下私欲を争い、乱世の始本と為す。而して今の世に至るも止むこと無し。拙い哉、自然を失る哉。自然は無始無終にして五行一真感神の靈活にして、進退に通横逆の運回を盡して、転定人物と為す。故に転定は自然の進退退進にして無始無終、無上無下、無尊無賤、無二にして進退一体なり。故に転定先後ある者に非ざるなり。唯自然なり。然るに己れを利せんが為めに之を失り之を盗み、転定に先後を附し、先を以て大極と為し、後を以て天地と為し、二つの位と為す。是れ失の始め大乱の本と為るなり。——伏羲を以て此説を為したりとするは、所謂安

藤の無学の致すところで、かかる誤謬の例は外にも多く見出さるのである。しかし大体に於て聖人が自然現象に好きな解釈やら意味を加えて自分に都合の好い様に勝手に価値観を拵上げるところを指摘したものとしては有効と認める。

以上序での事に安藤の文章を引用して見たものの、拙い上に脱字あり誤字あり当字あり、彼一流の用語あり、中々分り難いのである。例えば異然とは以前のこと転定とは天地のことで、こうした新語を使用されるので私も暫くの間は能く分り兼ねたものであった。彼の根本的思索の記述に至っては其性質上からも甚だ解し難く、其応用を見るに及んで漸く其意味のあるところを察することを得たのである。

自然の作用として見らるるものに互性活真の外に進退の考えがある。是は因果法に代るもので、通横逆の三つの形ちに現れることは前に引用したところにも見えている。是は善因善果悪因悪果の如き殆ど自明の理とは事かわり甚だ了解し難いものである。のみならず彼の五行論と出入して複雑を極め到底通俗の解説を許さない。故に之を評論することは容易の仕事でない。然るに幸にも救生の考えには更に用のなきことになっているから旁々割愛することとする。互性活真は進退に比べて簡単ではあるが、安藤の敘述は極めて不充分であるから、彼の考えに基づき私が補足することとする。

五 互性活真

近世哲学の父と呼ばれるデカルトは我考う故に我ありと云った。よく人に知られた語である。此語の意味は何者を疑うことが出来ても、疑っている自分自身の存在を疑う訳には往かないし、その又自分

自身の存在を知らせるものは自分の心であるから、其心は即ち最後の確かなる存在であり、其心によって自分の存在が初めて分つて来ると云うのである。一応尤に聞える。そこで彼は是を以て彼の哲学の出発点としたものである。其哲学の是非は今問題とするところではないが、此語を鵜呑にすると忽ち唯心病に罹る恐れがあり、また流石のデカルトも其当時彼が目的としたことにはかり注目して、此語を成立せしむるに必要な心理的條件などを考える暇がなかったではないかと思わるるから、一つ吟味して見ることにする。

凡そかかる抽象的なる思索を為すことの出来るのは、一歳や二歳の赤坊に望むべからざること、必ずや相当成熟したる心の持主でなければならぬ。そうした人は必ず我と彼との区別を知り、又其相對なることにも氣付いている筈である。そこで尋ねるが、一体我考うと云った我は彼を知らないのであろうか。どうして彼あるを知らないで我あることを主張し得るのであろう。一切の彼を空じ終つたとすれば相對性によつて我も同時に消滅して無くなる筈であらねばならない。即ち彼の附纏はない我と云うもののある道理が無いのである。故に事實問題として扱ふことになる。我と云う途端に既に彼もあることを認めていると云わざるを得ない。是は明白なることである。更に又純理問題として考へて見ても、我考うと云うときの我と、我有りと云うときの我とは、観るものと観らるるものとの別がなければならぬから、結局は矢張彼我の對峙となるのである。かく考へて見れば事實上にも理論上にも、心だけが真に存在するもので、それからあらゆる事物が生じて来るなどとは云われないこと、心即ち我あると同時に、物即ち彼あると見るが、本當のことであらう。ここ迄考へて来ると、あの語を思い付いた時のデカルトの頭には、相對的の我なる概念は単に孤立的の我なる語となつて浮ん

で居たのではなかつたらうかと思われるのである。若しそうでなかつたならば、彼はあんな唯心的に誤解され易いことを云わなかつたであらうと思う。しかし私は今云うとするのは唯心論にどの位の声援を与えたかを論評するのではなく、かの語の裏面には事實的にも純理的にも彼我相對と云うことが潜んでいることを指摘したかったのである。

私は既に事實問題としては我あれば彼がなければならぬと云うて置いたが、一体彼我の關係の意識せらるるのは何歳位から始まるかと考えて見れば、人に由て遲速はあるが、可なり幼稚の頃からと思われる。即ち呼んだり聞いたり、遣つたり取つたりすることが出来る様になれば、最早彼我の區別はついたのである。此頃彼とする者には親があり犬があり猫があり鶏があり馬がある。しかし尤も早く知られるのは親である。而して後になつて又總ての彼の中で尤も大事なる者は親であることが分つて来る。是は自分が親から生れたと知るからである。偕てこの知る事である。今私は自分が親から生れたと知ると云つたが、反対に自分から親が生れたと知つたら、どうであらう。自分から親が生れたと知るとは同一法には抵觸しないが現在の因果法には抵觸する。別個の因果法を具えたる者でなければ成し得ない芸当である。安藤も普通人と同じく自分は親から生れた者にとつた。之を事實とつたのである。此事實は人間の基礎經驗の中で最も重大なるものであることは何人も認めなければならぬ。而して之を實際に當て重大視することが遂に孝の教となるのであるから、常識ある人は皆孝を以て万善の基とする。孔子然り昌益然りである。昌益が曾參を以て人間第一人者と云つたのは外にも重大なる理由はあつたが、矢張り此孝に重きを置いたことは云う迄もない。孝は事實に基づいたものを知つたら、かの安藤の愛國心も畢竟するに又事實に基づいた自我の觀念の拡張に外ならないことにも

想達することが出来よう。そこで世間無我などを唱道したいと思う人があつたら、其人は先ず以つて無我を唱うるにも食物が要ることを考え、其食物を食うものは何者だと反省して見るがよい。忽ち無我など云うことは文字だけの空想に過ぎないことを発見するであらう。之に類する空想は甚だ多い。信仰的、理想的、靈的、神秘的、詩的、芸術的などという形容詞のついたことには動ともすると空想が跋扈する恐れがあるのは誰でも気付くことであらう。しかるにかかる空想に対する憧憬が生ずると、事実を軽視することになって、其結果種々な不都合を起すことになるのであるから注意を要するのである。

偕て話は前へ戻る。安藤は自分が親から生れたことを事実ととつたと云うことは、取りも直さず自分と親との間に成立する彼我相對の關係を事実と認めたのである。ところがこうした彼我相對の事實は客觀的に到る処に見出される。親子がそれである。夫婦がそれである。兄弟がそれである。君臣がそれである。而して孰れも彼我關係が成立しているのであるから、二つの中どちらか一つを失つたら、他の一つは全く意味を為さない事になる。此意味に於て彼我相對の事實は何にも五倫（人として守る）に限ったことではないので、自然に於ける事物は有形無形を問わず、悉く皆かかる對峙をなしているのである。即ち苦樂、和争、善惡、正邪、信疑、空有、因果等あるとあらゆる事物は皆単独には考えられないもので、必ず相手があつて成立するものであることが明白となつて来る。もし相對のことが明白でないものがあるならば、之を自他に兩断する法をとれば相對の事實が現れて来ることは論理を知っている者は直ぐと気付くことであらう。しかし安藤は是を知識の上に持行くことをせず、總てを事實と取るのである。即ち自然の事物を悉く相對的と見、相對性を有する者に非らざれば成立することを得ずと考へたのである。この相對性のことを互性の二字で表し、成立の状態を活眞の二字で現わ

し、茲に於て自然の事物は互性活真なりと云うのである。進んでは又これが自然の作用であると云う意味で自然真営道とも称するのである。

相対が實際に於て成立する以上、決して偶然のものではないので、其両極を為している事物は本来不離不即であると云う考は自然と出来るのである。此考を統道真伝の智を論じたる末に述べて曰く、真道は自然の進退にして一真道なり。則ち転定にして一体、日月にして一神、五穀にして一穀、男女にして一人、牝牡（獸のオス）にして一疋、雌雄にして一番、善悪にして一物、邪正にして一事、是非にして一理、表裡にして一般、生死にして一道、苦楽にして一心、喜怒にして一情、一切審かに皆二別を見るは即ち一真営の進退なり。此進退は一真営なり。安藤はこうした様な意味のことを到る処に繰返している。

自然真営道には事物の相対性を自明の理として、殆ど何等説明する所がない。縦に因果的に対峙するもの、横に共存的、反対的、排他的に対するもの、両断法によって生ずるもの等更に選ぶところなく無差別平等に之を互性活真と称するのである。又かの不離不即の機制の如きも自然の真営と称する以外に何等説明を試みない。実に荒削りの考方である。しかし同じく相対とは云い互性活真には髓に特色がある。どこまでも事物を離れずして、事物其物なりと取って行く所に、素朴乍らに甚だ力強いものがある。何となれば之を事物に即して見るが故に、事物を離れて存在する絶対を作出す如き見方を自然に防止することが出来るからである。かの哲学は之を知識の上に即して考うるが故に、動もすれば事物を離るる恐れがあり、相対に対して絶対を誘導成立せしむることは自然の勢いである。仏教の如きに至っては更に思想の操縦を恣にし、二重三重に相対を振廻して遂に迷妄に陥ったものである。

之を思えば安藤の考方は素朴なるがため却て迷妄に陥るを避け得たもので、彼にとつては実に幸いであつた。

互性活真は安藤の到達し得たる思索の極致である。究竟的立場である。法世を壊るも是れ、自然世を造るも是れ、一切事物の生滅は皆この互性活真に待つものである。是即ち自然の大法であるからである。安藤は之を以て、直に救世の利劍となし、法世を自然世に化成するに當つて殺活自在の妙用を發揮せしむるのである。

六 救世観

凡そ一切の事物は皆互性活真である。価値も之に洩るるものではない。互性であるから自然の上ではどちらにも重きを置く訳のものではない。双方相持でなければならぬ。もし偏重偏軽にして互性の実を挙ぐることも出来ないとなれば最早成立を許さない。善悪、美醜、正邪、曲直皆互性なるを以て偏重偏軽を許さざるものとなる。是に於て古今東西の教法は悉く意味を為さざるものとして、十把一槩に廃棄せらるるのみか、人を罪に陥るるための悪法なりと迄攻撃せらるるのである。統道真伝仏失を糺す巻の中に曰く、是れ悪を去れば善もなし。善を去れば悪もなし。左の手は善右の手は悪、右の手を切れば則ち左の手のみにて用を達し難し、大腸に糞ありて悪なり、胸には神ありて善なり。大腸を去り胸のみ之あるべけんや。夜は暗くして悪、昼は明かにして善。夜を去つて昼のみあるべけんや。故に物は善悪にして一物、事は善悪にして一事、転定にして一体、日月にして一神、男女にして一人なり。自然の妙を知らざる故に勸善懲悪と云い、或は衆善奉行諸悪莫作と云うは甚だ私の失りなり。——諸

の聖人釈迦は世を迷わし罪の穴に落し入ること大なる失りなり。と、かく論じ去るのである。此論法は直に又法律にも応用することの出来る性質のものであるから、そこで一切の政法も亦無効なりと申渡さるのである。かくして法世の教法政法皆悉く互性活真の蹂躪に委せられ、法律の權威も道德の尊嚴も遂に三文の価値なしとせらるるに至るのである。

社会から在来の政教を全く取去つたとすれば、後は修羅の巷となるであろうと思うのは普通の人の考える所であろうが、之は理論的には必ずしもそうとは取れない。殊に安藤は政教に代うるに自然の道を以ってし、法世に代うるに之に優る社会組織を以てしようと考えて居たこと故、政教を蹴飛ばしたのは当然のことで何も悪いこととは思っていない。此間に処する彼の信念の篤き意気の盛なる実に驚歎すべきものがある。しかし是は自惚れから出た暴拳と取れないこともない。何となれば彼は自然を互性とのみ取り、因果と取ることを知らない。全く知らないではないが見方が徹底しない、是は甚しい片手落と云わなければならぬ。自然を横断的靜的に觀すれば彼の云うところに道理はあるが、之を縱統的動的に觀すれば一切の事物は因果の形式に現れ来り、皆必然性を帯びて何等誤りのないものとなるのである。而して歴史の意義は此見方よりして生じ来ることを忘れてはならない。私は今此以上に穿ぐる事は止めるが、安藤は重大なることを見落していたことを指摘して置くのである。そこで先ず教法の支柱を失い土崩瓦壊に至らんとする社会に、安藤は如何なる応急手当を施すかを見よう。

安藤は忽ち又互性活真を振翳すのである。法世を屠つた利劍を以て又之を活かそうとするのである。彼曰く、争う者は必ず斃れる。斃れて何の益があろう。故に我道には争いなし。我は兵を語らず。我戦わず。なるほど互性のものであつて見れば相持でなければならぬのであるから争うべきものでは

ない。若し争えば争うものの方が斃れるか、双方が共斃となるか、又いつまでも争を継続するかに極まる。共斃の場合は論外として、一方だけが斃れ、片方が残った場合は、互性の見方からすると意味を成さないこととなる。又いつまでも喧嘩する位なら寧ろ早く和睦して互性の実を挙げた方が道にも協い幸福でもあるのである。ずっと前に安藤の平和主義は彼の思索の中樞をなしている所から派生し来るのであると云って置いたが、即ちこうした見方を云ったのである。この見方にも突込んで吟味せなければならぬ所もあるが、即ち予内平和策とか無戦論とかを主張する人、殊に又具體的主義主張を以て争わんとする人に此見方を勧めて見たい。就ては餘談でもあり適例でもないが、安藤の主張には多少関係があるからお話して見たいことがある。私は前に神の国は不渡手形だと云った。それで思出したのだが、読者諸君にも記憶新しいと思う。先年大学の新進氣鋭の学者が西洋の左傾派の人の言説を紹介した節、学生が共鳴して一騒ぎを起し当事者と争ったことがある。其学生の申分は神の国も無政府の如きものであるから、無政府主義もよいではないかと云うことであつた。其理由となつた神の国は不渡手形であると気付いたら学生は起たなかつたのであろうし、又一切事物を互性に見たらば、人騒がせをする様な事は先以て初から起らなかつたのであろう。かれ安藤の如きは無政府虚無主義などを振廻して喧嘩をするのは子供のする事で、何も大人が子供の真似をして、打つたのはたいたのと云う苦々しい經驗をする必要はないと見ている。是は実行に訴える迄もなく考えただけで直ぐ分る。故に彼は百年を期する。又常に互性活眞の劍を懷にしながら唯之を撫するのみで、決して人に切付けない。そこに武士の情がしのばれてゆかしいところがあるではないか。敵味方ともに見做つて貰い度いものである。

男女の關係の乱ることが争鬪の端をなすのは周知のことである。是は大切なことであるから特別の扱いを要する。安藤は性の樂は無上にして念仏の心も起らずと云つたり、倫理を裏返しにしても解釈の付かないことを認めたりして、甚だ同情を表するものであるが、もし彼を立川派(日本密教の一流流。性交によつて男女が大日如来と一体になる)の亜流と見たり、現代無法主義の先驅者と見たりしては全く彼を冒瀆することとなるのである。そこで彼は嚴肅なる一夫一婦制の主張者であることを聞いたら失望する族もあるかも知れないが、致方いたしかたがないから説明する。偕さ茲こゝに m 男 n 女ありとすれば各男各女と結むす付ひく可能性あるが故に、 m 男 n 女の混合物を想像することは、之を實驗に訴えなくとも容易である、就中一男数女或は数男一女の集團も出来る。しかし尤も坐りよき釣合を保つものは一男一女の結晶である。而して其結合の強固なる理由は争いの起ること少いからであらねばならない。この争いを少くすると云う理由の基に一夫一婦制を主張するのである。若しこの制に戻るものありと見れば安藤は王公と雖も許さず、彼一流の痛罵を浴せる、這般しやはんの消息を語る言葉に一夫数婦は野馬の業なりというがある。一婦数男を聞いたら蜂蟻おこなの行いに如かずとして笑つたであらう。

右の定理の系として、独身はいけないこととなる。男女は互性活眞の理に協かなう様に一男一女の配偶をとらなければならぬから、独身は片輪である。所謂一男一女にして初めて完全なる社会人となるのである。此意味に於て男女を人と訓読せしむるのである。

安藤は互性活眞の利劍を以て世相を切捲り、其矛盾不合理を摘発し、法世をして完膚なきに至らしめ、かかる不都合なる法世を現出せしめたる重なる原因は、思想の指導者たる聖人及び宗教家にありとするのである。彼等は自然を覺らず正智を得ざるに氣付かず、妄迷もう的なる亢偏智を以て自然を曲解

し、種々なる価値観を立て講説、文章、芸術、暴力等あるとあらゆる方法を以て其誤りたる理想を實現せんと努めたる結果、人々皆高きを思い、貴きを思い、利を思い榮を思い、之を求めんとして遂に罪惡を作るに至つたのである。人々は慾を煽られ罪惡を犯すに至つたとすれば、之を煽つた者は尚更深い罪惡を犯した者と見ざるを得ない。此見方を為すことに由り安藤は聖人格の人を糞に比し、其言を聞く者を青蠟と云うのである。又或所では自分は糞と呼ばるるも意とせず、却て聖人と呼ばるるを恥づと云うのである。其理由は糞でも聖人より有益である。

此見方は頗る峻酷である。安藤は亢偏智を弄する者と取り免さなかつたであらうが。知らずして善意を以て為す者と見たら免さなければなるまい。しかし知っているが故に人欲を煽り己の爲めにするものありとすれば是は免すべからざるものである。聖人を擔廻る徒にも往々此の如き者を見出すに至つては実に法世の爲めに悲まざるを得ないところである。こうした不都合も食う爲めの職業であつたり商売であつたりする上に、又其所に種々秘密な關係があつたりするので、為政者も大目で見て置かねばならない様な所がありとすれば、法世は文化の進歩につれ却て欺瞞の陳列場の如き觀を呈し、一方には奢侈逸樂を助長し、一方には怨嗟失望を誘致し、人心を悪化せしむることあるも、終に如何ともするこゝと能わざるに至るのではないかと考えられる。此傾向は慥にあるものと認めざるを得ない。色目鏡を外ずせば歴然として目前に現れる、隱匿弁護の餘地はないのである。是は実に法世の欠陥であり病氣であるのである。これあるがために罪惡を犯すもの盡さざるも亦明白なる事實である。而て其欠陥其罪惡の根本的救治は之を律法に求むるも得べからず、之を教法に求むるも亦得べからざることは、既往と現在とに徴して是亦餘りに明白なる事實である。かかる明白なる事實は事實なるが故に之を如何と

もすべからざるものと見ることも出来る。是は頗る透徹したる見方である。しかし法世の見方はここまでは徹底し得ない。どうしても相も変らぬ教法を以て糊塗することに勉むるの外ないのである。然らば即ちその根本的救済策は到底成立の見込立たざる性質のものであろうか。これは是れ真に世を憂うるものの夙夜（中一日）忘るべからざる問題でなければならぬ。しかしかかる問題を単に提起するさえ容易のことではない。まして成案を作るに至っては弥々以て至難のことと云わざるを得ない。法世を捨て自然世に向わせしめようとする安藤は責任上此問題に対する具体案を示さざるを得なくなった。勿論聖人も考付かなかつた新しい試みであるから、少しは驚く様なことがあるかもしれない。其代り所謂百年を期するので、決してクーデターに出ざる様な政略的卑劣のことはしない。全く相談的に出るのである。其上安藤は口不調法でいけないから私が彼の考えたことの意味を代演する。

武士は封建制度の作り出した最高の産物である。国土に培う桜と共に日本の名物となつてゐる。武士の尊き所以は武士道にあることは云うまでもない。其武士道は如何にして出来たか。諺に衣食足つて礼節を知ると云うことがある。彼等は皆禄を貰い、末代生活の保証を得て居たものである。之を与るものの義務慈愛の態度と、之を受くるものの責任敬愛の觀念とが融合して、微妙の勢力となり、彼等の意志を精練し行動を莊嚴ならしめた結果が即ち其武士道である。根柢に於ては上下相愛共存共栄の心に外ならないのである。かかる結構なる制度があるならば、四民悉く武士になつたらどうであろう。それでは明日から食物に差支えるから困る。いやそこである。食物は何よりも大事と気付いたら、武士は武士のまま帰農する。而して其中から必要に依じて工商を営むものを作ることにする。しかし誰一人徒食の遊民たることを許さない。皆劳作して食うこととする。苟くも武士たるものは末代生活の

保証を得ているのであるから愛国奉公の志篤からざるを得ず。依て所得を政府に納め、其代り生活に必要な支給を受くる事を条件とするのである。政府に於ては其意を領し、尤も公平なる配給法を工夫し、暴富奢侈等罪惡の原因となるべきものを發生せしめざることに注意する事は云う迄もない。而て歳計の餘裕を以て公共施設を整頓せしめ、国民全体の幸福を増進せしむることに盡力し、以て共存共栄の実を擧ぐるのである。偕て其政府はどうする。是は大和民族の意志に尋ねる。かくして出来るところの新日本は武士道以上の精華を發揮して譽れを万国に輝し、人類をして皆我日本に倣うことに至らしむるのであらう。

以上の案は云う迄もなく罪惡を未然に防ぐ目的を以て提出するのである。安藤は戦を好まない男であるから、武士を農列に引摺落そうとするのであるが、私は武士側が覺醒して任意帰農する如く説いたといった違のあるばかりで、成立するところの民族的農本組織は孰れからするも漸近的に同一点に帰着するものと見て差支ないのである。故に私の述べた所は安藤の説を曲解したものでなく、彼の精神を呑込み易い様に現わしたものである。私の述べた案が賛成を得ないこととなれば安藤の案は尚更いけないこととなる。

自然の何物たるかを知らざるものは仁義の桎梏を免かれ、欺瞞の陥穽を避くるに明もなく力もなく、滔々として罪惡を犯すに至るのである。之を見るに忍びず、知らしむべからず、由らしむべしと考えるものが即ち農本共産主義である。此考は真道哲論の中に簡単に書いてあったばかりで、外には何処にも詳説した所がない。故に私も大体を記すことに止めよう。昔し楚の許行が君民並耕の説を為したのは頗る共産主義に近かったものらしく思われる。今又ソビエツト・ロシアで労農共産を大仕懸に達

成しようとしているが、成否の程が見物である。学者の議論に至っては、紛々擾々、未だ帰着するところが無いと見るべきである。此間に在て安藤の提案は其量に於ては甚だ貧弱なる感をなすも、其質に於ては尤も優越したる功ありと云うべきであらう。何となれば欧米の主義は単に經濟問題に立脚し、反対に立つところの同胞を仇敵視し、忽ち喧嘩を始むるを通性となしているが、安藤の主張は事物の根本原則に立脚し、万事を理解して決して争いを為さない特性を有しているからである。この立脚地の相違に動機の純濁を發見するのであるから、玉石を混淆すべきでない。

救世の道程としての農本共產あるを見た所で、後は唯自然世の何物たるかを見るものが残っているばかりである。しかるに安藤が其説明を試るであらうと思われる顕正之卷の中、何所にも其記事が見当らない。私が見ることを得なかつた生死之卷に地獄極樂の存在を主張しているなど想うことは子から親が生れると考える位覺束ない話であり、他の部分は悉く自然現象の彼一流の説明を以て充たされたあるのを以て見れば、彼の考が那邊(ど)にあつたかと云うことが推測出来ると思う。即ち自然性とは先ず罪惡の發生を最小ならしむる目的を以て準備的に布くところの農本制度の樹立に始まり、自然の現象の正確なる知識を獲得し、其知識により改良しつつ落着くところに落着くのを云うのである。是は安藤にも具体案がある筈がないので、書くことを見合したのであらう。

私は安藤は医者であつたらうと云うことを推測して置いたが、彼は医学以外の知識も可なり広く持つていたのである。顕正之卷六十餘冊は彼の学殖を現わすものであつて有らゆる方面に亘り、量に於ては不足を云えない。しかし遺憾ながら取るべき所が甚だ少ない。或は歴史上の捏造説を看破したり、動物と其食物との形体の類似を推考したりして、頗る人を驚かすに足る奇論も吐くが、至る処に五行論

を振廻すのは甚だ惜まざるを得ない。しかし是は科学的知識の欠乏に歸すべきもので、當時に在つては致方のない事であつたらう。そこで私は此以上奇説や罵倒を聴くことを止め、彼の尤も重きを置いた救世觀を説明し終つたところで、一寸その概評を試みる。

先ずその救世觀を一瞥すれば、法世とは個人的に人慾を助長する制度文物の世の中。自然世とは衆人的に人慾を満足せしむる制度文物の世の中。共産は個人慾病の下劑。科学は個人慾病衆人慾病共通の良劑。而して食物は必要欠くべからざるものなるが故に衆人農業を基として食物の充実に勉むること、とこうなるのである。其婦農充食に重きを置くに鑑み、彼の救世は救生であると云えよう。

凡そ絶対性を帯びたる独尊不易なごう考え方の大概間違つてゐることは、歐洲の思想界に在つても餘程前から知られて来た。それ故また急激の思想を調停するに都合のよい宛然哲学など云う折衷説も出来ている。世界大戰以來は實際の例証が多く提拳せられ、普通人も往々知ることになつたので、何等深き思慮のない者が雷同することが起ると危険甚しきものがある。実に二十世紀は容易ならぬ時となつた。この時に當つて二千年から前の釈迦やキリストの称えた救世の様なことを持出すのは時代錯誤の話であると思う人もあろう。強ちそうでもない。救世と云う語は陳腐ではあるが、其実は今日の改造である。兎に角有難いことの様に聞える。釈迦やキリストの救世は心や靈の上に在つたが、安藤は之を肉体に及ぼし何から何まで救つと云うのであるから面白い。儒教も略同一の見方をしてゐるが安藤ほど根本的ではない。孰れの国家に在つても救世的の施設を要することは明白なることで、是は国民に對してどうしても為さざるを得ないと云うのである。そこで世界に於ける今日の政治が宗教などの力を借りて応急の救世を講じて見ても万一旨く行かないとすれば、救いを求むる者に不平の起ることは

必死の勢いであらねばならぬ。而して求むるものと与うるものとの間に甚しき間隙を生ずれば、鬱積したる不平は致命的に放たるる恐れがある。是は尤も憂うべきことである。安藤は今日あるを見越して立説した訳ではないが、彼はかかる衝突の起らない様なる社会を建設しようとしたのである。彼の農本組織は第一の目的は罪惡の防止にあるも、其樹立の結果として与うるものと受くるものとの対峙は同時に消滅に歸することは慧眼（鋭い洞）なる読者の見逃さぬところであろう。即ち不平の鬱積することのない様に工夫せられていた安全策であったのである。よし又此案が始めから無かつたとしても、彼の妥協的態度を維持し、決して争を為さないと云うことは、尚且つ彼の存在をして大に意義あらしむるものと云わざるを得ない。何となれば与うるものと受るものとのに於て此妥協的態度を学ぶことありとすれば、忌々しき争鬪の起るごときことがなくなるのであるから、単にこれだけにても彼の目的は幾分達せられたものと見るを得るからである。実にこの普遍的妥協の精神は彼の衝天の意氣と両々相待つて彼をして大を成さしむるに足るものである。彼の救世策其ものに至つては珍らしく徹底的であるとは云い、根本思想に重大なる欠陥を有し、論議すべきところも甚だ多い。一々批評するのは大事であるから単に之を指摘するに止めて置いた。想うに本当に正確なる救世策はまだ中々出来る迄に世の中は進んで居ない。これはずっと前に引合に出した物理学の見方に立脚した救世案が出る時にならなければ望むことは出来ない。しかし何時でも黙つては居れないから、臨機の救世策とか改造策と出来るのは止むことを得ない。聖人連中は皆此考を以て起つに至つたものである。安藤昌益も亦其一人である。而して起つ人も来る人も安心を説き、修身を説き、救霊を説き、その説の確かなる証拠は地獄の入口で分らせると云うのであるが、独り安藤は微塵も此教を説かない。唯だ足食救生を喚ぶ

のみである。帰農を勧むるのみである。直耕を尚ぶのみである。勿論証拠は現世に在ると云うのである。茲に於て与うるものと求むるものとの別なく、平心坦懐、己れを省み人を察し、皆この足食を以て第一義と成さねばならないことに想達することあらば、安藤の尚耕説はたしかに争うべからざる威力と、辞むべからざる恩意とを以て、誠意誠心に考按せられたるものであることを認めざるを得ない。苟くも生命あるもの宜しく猛省すべきであらう。

- 『狩野亨吉遺文集』（岩波書店、一九六九年八月、第五刷）所収。
- 旧字・旧仮名遣いは、新字・新仮名遣いにあらためた。
- ただし、一部の漢字は旧漢字のままにして、振り仮名をつけた。
- 読みやすさのために振り仮名を付加した。
- 理解を助けるために割註をつけた。
- 外国人名は通行の名前に改めめた。
- PDF化には $\text{\LaTeX}2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。
- 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>
- 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内 「科学図書館掲示板」
<http://6325.teacup.com/munehiro/ameda/bbs>